

4. 関連施設調査の記録 2

(2) 第2回先進地視察(近畿地方)

目 的：新名護博物館建設に先立って、先進的な運営を行っている博物館を視察し、その施設だけでなく、組織・運営、市民活動について情報収集・意見交換し、名護市の新博物館建設に役立てる。今回の視察は、(1)資料の保管方法(2)展示手法(3)諸室の構成・連環 (4) 学校連携(5)友の会等ボランティア活動を中心に意見交換、視察した。

期 日：平成24年3月21日(水)～3月24日(土)

視察地：滋賀県立琵琶湖博物館・大阪市立自然史博物館・大阪歴史博物館・兵庫県立人と自然の博物館

参加者：検討委員(宮城一夫、末吉司)／名護博物館(山本英康)

●滋賀県立琵琶湖博物館

〒905-0001 滋賀県草津市下物町1091番地／1996(平成8)年開館
敷地面積42,434 m²／諸室面積合計23,987m²／整備事業費21,979,389(千円)
＜運営＞直営／入場料：大人750円他／開館時間9:30～17:00／毎週月曜休館
＜特長＞琵琶湖をテーマとした自然史・歴史・文化・暮らしを表現した博物館。展示に手作りの工夫がみられる。



●大阪市立自然史博物館

〒546-0034 大阪市東住吉区長井公園123／1974(昭和49)年開館
開館時間9:30～16:30／月曜休館・年末年始(12月28日～1月4日)
＜運営＞指定管理(大阪市博物館協会)／入館料：大人300円
＜特長＞自然史資料の数が多く収蔵庫の充実は目をみはる。



●大阪歴史博物館

〒540-0008 大阪市中央区大手前4丁目132／
敷地面積12,999m²／延床面積23,606m²、展示面積4,118m²、収蔵面積2,188m²
＜運営＞指定管理(大阪市博物館協会)／入館料：大人600円
開館時間9:30～17:00金曜20:00
＜特長＞大阪城が見える場所で、難波にこだわった思い切った展示。



●兵庫県立人と自然の博物館

〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目／1992(平成4)年開館／
敷地37,036 m²／延床面積18,691 m²／
＜運営＞兵庫県直営／入館料成人200円
開館時間10:00～16:30／毎月曜日休館
＜特長＞年間300を超える体験活動があり参加者も多い。



4. 関連施設調査の記録 2 - 琵琶湖博物館 -

■琵琶湖博物館との意見交換記録

平成23年3月22日 午前10時～午後3時

○・・・新名護博物館基本計画策定委員

●・・・琵琶湖博物館

<地元企業との連携>

●ミュージアムショップは、琵琶湖の生き物を中心にした製品がつくられている。例えば、クリアファイル、ホルダー、学生用下じきなどをオリジナルなものである。

琵琶湖博物館では、企業からディスプレイ、省エネタイプの照明などを提供してもらい、展示に活用している。当然、企業の説明も行なっている。

企業からの金銭は入っていない。映像を滋賀県で作り、パナソニックのテレビジョンを寄贈してもらい、展示場で放映している。琵琶湖周辺に立地する企業は、社会貢献のイメージから、製品を寄贈するシステムがある。

積極的なタイアップはできてないが、個別の活動としては、滋賀経済同友会が滋賀県にあり、2009年に「滋賀生き物イニシアチブ」という宣言をした。それは、同友会加盟の各社は必ず義務として「1種類の生物、または、1か所の生息地を守ることに貢献する活動をしよう」という宣言。それを持って2010年のコップテンに臨んだ。最近、生物の構造を技術的に活かして製品にしていこうという方向になびいていて、生き物保全が社会的な価値をもたらした。

滋賀県草津市にある照明器具を提供していただいた日本ガラストロニクスという会社の社長さんは、オオカミガワ（狼川）の上流から下流まで、川沿いの10数社に川の生き物調査をしようと呼びかけた（今年で終了）。それなどは琵琶湖博物館が指導しているという連携方法である。

○企業が川の調査を行うきっかけは？

●COP10での取り組みだが、環境意識の高い企業は前から始めていた。2005年頃、琵琶湖の博物館に出入りしてくれていたWWFジャパン（世界自然保護機構）の方が研究委員で、魚の調査をしていた。

彼が琵琶湖博物館に来た大きな理由は、博物館と企業の連携で、地元企業（ブリジストン）の彦根工場と琵琶湖博物館が連携して、琵琶湖の魚の調査をやっていくこととなった。琵琶湖博物館には「ウオの会」という組織があって、そこで魚の種類を調査していた。

●地元には「はしかけ」という言葉（「仲人さん」という意味）があり、博物館活動と地域活動の間に入る人を養成しようという自主的な活動につながった。地元で琵琶湖博物館を使ってもらい、自主的な活動を深めてもらおうということだった。琵琶湖博物館ではこの「はしかけ」の活動を支援し、彼らの活動を展示会にもっていくこともある。



琵琶湖博物館外観



エントランスホール（琵琶湖博物館周辺の空中写真が埋め込まれている）

4. 関連施設調査の記録2 - 琵琶湖博物館 -

○企業が参画するメリットは？

- 企業の社会貢献という意識と社員教育の目的もある。企業の工場がある地域で、その家族が魚の調査に参加している。滋賀県南部には湖南企業いきもの応援団という組織があり、夏休みの期間に家族連れで来てもらっている。それは中小企業で、勤務時間内に子ども達と一緒に調査に参加してくれた。年に4回、2年間という限定つきでおこなわれたが、今度の4月で3年目になる。

<市民活動>

○連携の方法で、魚を釣る人との連携は？

- そういう団体はない。「魚の会」の調査というのは、何人で何分やってどれだけ捕れたかという作業量を一定にし、マニュアル化した調査。釣りは手段に含まれていない。

○「はしかけ」の組織ができたのはいつ？

- 琵琶湖博物館は1996年にできたが、「はしかけ」は確かその3年後にできている。

「はしかけ」ができる際には、友の会を作るといふことの議論があり、結局は友の会を作ることをやめた。もっと新しいことをしたいということで「はしかけ」を作ることになった。

「はしかけ」の制度に則った15ほどのグループがあり、約350名の人が登録されている。私たちは、博物館の高度利用者として位置付けている。博物館をただ見るだけではなく、博物館を使っていこうという人達である。

もう一つは、野外に出て調査をしていこうという「フィールドレポーター」というグループがある。登録制度になっていて50人ほどが登録している。このような組織図は琵琶湖博物館のホームページにも掲載されている。

○組織形態やその組織をまとめているのは、どこ？

- 「はしかけ」の組織形態は並列で、学芸員が担当者としてつき、博物館でまとめている。担当者は「はしかけ」グループと博物館の間に入っている状況。

学校現場との連携はないが、学校との連携で体験学習のプログラムを開発するグループはある。「びわたん」と称する「琵琶湖わくわく探検隊」という組織で、体験学習の日として第二・第四土曜日午後、就学児童や親子連れを中心に体験プログラムを実施している。総合的学習との関わりも大きい。

「魚の会」は展示までもつながっている。鳥は野鳥の会があり、植物、昆虫などで同好会がある。隣の大阪などは熱心なアマチュア研究家が多くいて、専門家もたじたじのグループがあるが、滋賀県にそこまでやるグループは少ない。

<行政内の連携>

○学校との連携は？

- 学芸員職員は30名いるが、スタッフの中に人事交流のわく組で、小中一人ずつの学校教員の担当がいる。農政分野、水産分野、林政、河川土木（河港課）などの県職員が2、3年の期間博物館に席を置いている。

○そういう人事は博物館ができてから？

- 水産は準備室の段階から。開館と同時に農政と土木が来て、少し遅れて林政が入った。

○琵琶湖博物館を建設する部署はどこから？

- 教育委員会から始まり、県に琵琶湖環境部ができて、その中で配置換えされた。

○行政の横断的な体制のメリットは感じられる？

- 人事交流は、県庁から来た人が期間中に琵琶湖の環境をしっかりと学習し、もとの部署に戻った時にもまた、橋渡しとしての役割りがある。魚の展示の時には水産が、田んぼについては農政が、というように展示の中身の濃いものについてはそれぞれで人力いただいている。例えば、農業をするにも化学肥料をなるべく抑え、環境にこだわる農業などを認証、支援していく手立てがあったりする。

4. 関連施設調査の記録 2 - 琵琶湖博物館 -

- 沖縄でもやんばるは世界遺産登録にむけて動いているけれど、地域でやるところまで至っていない。
- 世界遺産となると企業活動が制限されるので、博物館が全面にでて調整を行わないといけない。
- 名護では企業間連携を想像していなかった。沖縄県の水はやんばる地域に頼っている部分がある。
- 「はしかけ」は、地域コミュニティーの部分と、在来文化資源との関わりが強く、それぞれの組織が遊撃隊のような形で動いているといえる。

<館運営と組織>

- 学芸員は、この部屋の机と研究室を持っている。今空席が多いのは研究室にいるとらえていい。琵琶湖博物館の組織としては、①展示部門②資料部門③交流部門④企画調整部門というものがある。学芸員は原則として研究職なのであるが、博物館の職員として博物館を動かす仕事もやってほしいということで、4つの部門のいずれかに所属している。
研究重視の人は、研究を主に行うことになるが、事業の方に重きを置く学芸員がいて組織的にはバランスが取れている。
事業の方の例を示せば、研究が本務といいながらも、事業を中心に仕事をしている。研究については、琵琶湖についてのだけでなく、世界レベルの研究ではあるが、琵琶湖に関わりのある研究が多い。

○赤いジャケットを着た人たちは、ボランティア？

- 業務委託をしている館内ガイド。展示交流員として、受付だけでなく展示空間を来館者と一緒に交流する人達で、ガイドツアーはしない。
学校ツアーには何も案内しない。数が多いのでそれをやっていたら何もできなくなるので、原則しない。ただし、例外があって目的が明確な人達については、そのニーズに応えるための案内はある。ある学校団体は受けて、どうして私達は受けないのかという意見もでてくるので、そうすると館がパンクする。

○展示交流員は何名？

- 20数名いて常時10数名いる。目的意識の高い人で、受託された枠の中で動いている人達である。人材派遣の人達ではなく若い人もいる。委託業務の勤務で、給料をもらってやっている。
水族飼育として生きた魚も展示としているので、水族飼育業務も委託している。資料整理としての業務委託もあり、管理部門の清掃委託部門もある。
琵琶湖の博物館では、もともと水族の展示があり、それを今に活かしている。現在は、5人の担当がいて、その人達を中心に水槽を管理委託する業者の指導、監督を行っている。以前は琵琶湖畔の天津にお城の形をした琵琶湖文化館というのがあった。2階以上が文化財を扱う施設で、博物館ができる時に、琵琶湖文化館の水族部門をスタッフと共にウチにもってきた。規模は3〜4倍に拡大したが、人数は拡大していない。

○資料活用の担当者はどのような業務を行っている？

- 資料担当の学芸員がすべてを扱えるかといわれれば無理な話。それぞれの専門の担当に任すことになる。専門の学芸員としては交流事業の場合に観察会を行ったり、資料の整理をしなければいけない、資料をつくらないといけないというものがあるが、そのアレンジをそれぞれの担当者が行っている。

○それは、普通考えられる組織として考えたほうがいいのか。あるいは、格付けされた組織のリーダーとしてなのか、ローテーションで回しているのか。

- それぞれのローテーションで回っている。固定はされない。年長者やキャリアが上のほうがグループリーダーになる。

○国際機関との連携は？

- 外国にも姉妹博物館があって連携をとりあっている。

4. 関連施設調査の記録2 - 琵琶湖博物館 -

<企画展・特別展>

○琵琶湖博物館の企画展は、どのように行っている？

●開館直後は年に何回かやることを考えていたが、しっかりとお金をかけて行っているので、年1回として期間を長くしている。例えば、7月の夏休みから11月の23日までの勤労感謝の日まで、4ヶ月を企画展にあてて固定している。

○企画展の種類によって集まる人が変わってくる？

●4月からギャラリー展示で行う鉱物、化石の展示会は鉱物愛好家達の展示会で、手作り感のある展示となっている。今年の夏の企画展は田んぼになっているが、以前にやった田んぼの企画展は、県の農政部局が企画してここで企画展をした。ひとつ前は民具の展示で、なるべく企画展示室を開けないようにしている。

小規模で、博物館の職員が受付以外はノータッチという新しい空間、ある一定空間の下で市民が自由に使えるスペースを設けた。今は、ホタルの愛護グループがやっていて、借用料はとっていない。

○市民が来場する割合はどんな具合？

●来場者は地元が多いし、学校が多い。

○観光客の来館は？

●観光の方々も来ている。今年（平成22年）は36万人だが、年々減ってきていて最低50万人はほしいと思っている。開館した時は100万人入った。

○入館者の問題はシビアなものになる？

●博物館、美術館の目標は入館者状況だけでは数値化できない。どんな必要な研究をやっても、どんな特徴的な研究していても、反映されないところがある。

何年か前に料金改定を行って、就学者は無料にしようということになり、その分大人料金を上げた。計算上は同じ比率だと入館料収入は変わらないはずだが、割高感が勝ってしまった。子ども料金はしっかり取っておいたほうがよかったかもしれない。現在大人一人750円なので、割高感はある。

○企画展の内容は観光の面も意識するか。

●意識しない。名護の博物館はコンパクトなので、初めて外から見の人にとって楽しい展示になっている。1階のあの空間は圧巻だった。地域性であるし、他で見られないもの。

博物館の大きな役割の一つは、一般的な知識を分かり安く見せること。多くの科学・自然史博物館で見られる、一般の教科書に載っているものを展示する方向と、うちの博物館のようにオリジナルなものを展示するというものがある。名護の博物館は、完全にローカルなもので感動した。

○あれは、博物館で利用するというよりは、市役所の事務所であったのを改造して作られたもの。

●静岡県では、廃校になった高校を使って博物館を作ろうという取り組みがなされているところもある。

●有料空間と無料空間をどう分けるかという問題がある。

はしかけグループには、自然発生的なものもあり、学芸員が研究の裾野を広げるために起こした組織もある。友の会のような全体としてのまとまりはない。

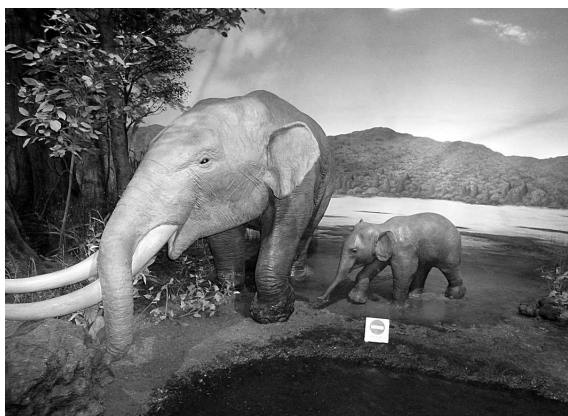
○それぞれ独立していて連携はしない？

●はしかけに入る時には説明会があり、入館料も無料になる。年間の拠出金は保険料だけの500円。

○フィールドレポーターは、どういう役割でどのようなことをする？

●年に2回か3回テーマを決めて調査をする。それをみんなに呼びかける際の郵送代も博物館で持っている。

4. 関連施設調査の記録 2 - 琵琶湖博物館 -



常設展示室（ゾウのいる森）



常設展示室（魚釣りをする親子）



常設展示室（漁師の暮らし）



常設展示室（琵琶湖周辺の自然）



屋外展示・生活実験工房（前には田んぼがある）



学芸員の紹介

4. 関連施設調査の記録 2 - 大阪市立自然史博物館 -

■大阪市立自然史博物館との意見交換

○名護博物館基本計画検討委員

●大阪市立自然史博物館

<施設の運営>

●ここは、スポーツ施設と公園と植物園と博物館などの公共施設を整備しながら1977年に博物館も建設された。元々は競馬や競輪場。1974年に植えられた植物が一番古い。元々は、大阪の自然の歴史を迎えるという形で進められた。空間的にいうと都市、農村、里山、山地など環境を考えて建設された。

コンセプトは「人の生活と自然」をテーマにして、自然の中で人がどのように変わっていったのかを表現している。さらに、人がいなかった頃、第三期（新生代）のアケボノゾウの生息した頃の植物の様子も展示している。博物館で展示を見て、実際の植生を公園で見学できるようにするというのが初期のコンセプトになっていた。

しかし、公園は建設部の部署になっているため、現在は市民が植物を見て楽しむ方向に進んでいる。

運営の仕方は、以前は博物館自体が教育委員会の直営になっていたが、今は指定管理になっている。

○直営と指定管理の方法について、市民にとってはどの方法がいい？

●事務職は、3、4年で移動するので、そのスペシャリストが育つかというと難しい。現在は、学芸員以外は市の職員がいなくなった。そのため管理職員が市の当局との調整にあたるが、それが難しい。指定管理になったからからといって、市の手法に習わなければならない。また、広報についても市の職員がそれ専門でやっていくのは、なかなか難しい。まだどういう形がいいのか決定打はでない。

大阪市には博物館協会という外郭団体があり、一括して5施設を指定管理している。その意味では、スケールメリットが出ている。そのシステムは2年ほど前から始まった。

その前身は、大阪市文化財協会という埋蔵文化財を中心とした機関であり、その組織が大阪自然史博物館と大阪歴史博物館を指定管理していて、さらに3館を含めた形になってまだ2年目。人事交流もまだ行われていない。



説明を聞く検討委員



常設展示室（アケボノゾウ）

4. 関連施設調査の記録 2 - 大阪市立自然史博物館 -

○その後館の運営方法は？

●館長クラス、総務課長クラスで集まる運営委員会や、学芸員クラスで集まる会議がある。

①大阪市立自然史博物館②大阪歴史博物館③大阪市立美術館④大阪市立東洋陶磁美術館⑤大阪城天守閣の5つを、財団法人の大阪市博物館協会が指定管理している。この財団にはOBも含まれているが、現職の市の職員も含まれている。

<入館者について>

○自然史博物館の現在の入館者はどれほどか

●本館の常設展示の方に17万人、特別展示室には、入館料も含めて去年は10数万人である。併せて30万人以上の入館者がいる。

入館料については毎年目標値を定め、利用料金制度を導入し、目標を超えればインセンティブが働き、自由に使えるわけではないが、入館者サービスをよりよくするための資金の割り振りができる。

○目標値は何万ぐらいの想定？

●目標値を想定するのは、私たちも加わり話し合いをする。過去5年間ぐらいでだいたいの入館者の目標値がでる。展示は古くなっているが、だいたい17万人前後の入館者である。新しい展示ができると増え、時間がたつと減るという繰り返りで、ノコギリ歯状の入館者グラフができる。

○その期間にリニューアルは？

●1974年にオープンして、10年程度ごとにリニューアルすることが望ましいということだった。1986年には50パーセント弱の展示変更ができた。次に1998年に基本計画が始まって実施計画まで進んだが、財政難でストップし、新館と収蔵庫の方を改修した。2006～2007年度に第5展示室を改築した。博物館展示の変遷については、過去の展示手法が共存しているという状況。博物館の照明一つについても、長い時間展示していると退色してくるので、照明を暗くしたり、新しい展示物については、照明を明るくするなど工夫している。

○建物は構造的に大丈夫？

●耐震診断の検査は行っているがある程度の補強は必要。1974年の建物なので旧耐震である。

○東北大震災後の建築物についての議論は？

●この博物館が標高10m。収蔵庫は地下にあるが、今のところ津波の想定はしていない。

○調査・研究はどのように進めている？

●数年前から初めているのは、博物館友の会の会員へ呼びかけ、淀川水系のいろんな場所で調査して標本をまとめたり、展示会までもっていったりすることもある。グループで呼びかけて活動をしている。

○学芸員は館に何名？

●現在は、館長を含め15名。

友の会は、大阪市自然史博物館友の会の名称で、会員は1,700名ぐらい。NPO大阪自然センターという組織が運営している。この組織はもともと友の会からの流れで、館が運営しているわけではない。月刊誌を発行し、博物館が行っているイベントや、友の会が会員向けに行っている行事のお知らせが掲載されている。最近は、ウェブ、ネット経由での情報収集が多くなっている。

4. 関連施設調査の記録2 - 大阪市立自然史博物館 -

<友の会について>

○館から友の会への援助は？

●月刊誌の編集は館が責任をもって行い、いろんな観察会などの助言、指導などを行っている。

○実際の職員の研究などはどのように？

●研究紀要とか自然史研究という2つの発表で標本の収蔵資料目録を作成している。学芸員個人で投稿して学会で発表することがある。

○1,700名の会費はどのようなシステム？

●通常は個人会員、家族会員、団体会員に分けられているが、こちらでは、家族のだれかが会員になると、会員証を発行して、家族全員が友の会の特典を受けられるシステム。以前は館内でイベントを行う時には行事、観察会は無料になるような「友の会の日」を定めていたが、不明瞭というので、友の会の会計から団体入館扱いで、年間何十万円かを館に支払っている。そのかわり、会員は年間を通じて無料になっている。会費は年間3,000円で運営している。実際は、昆虫採集標本などの情報を得るための購読目的の人が500人で、本当に博物館行事に参加できる人が1,000名ほど。

大阪近郊では、奈良県、京都も自然史博物館がないことと、兵庫県には「人と自然の博物館」があるが、神戸などの都市地区の住民は当館の方がアクセスしやすい。

○友の会の役割は？

●博物館に一番近い人といえる。何かあると市民の立場から博物館側にたった発言が市当局に伝えやすい。

名護のような総合博物館だと、自然好きと歴史好きなどに分かれるのではないか。

博物館のまわりには、自然発生的に自分たちで立ち上げたサークルや、学芸員が仕掛けたものがいくつかある。観察会に参加するだけでは物足りなくて調査に入ったり、昆虫同好会や近畿植物研究会が古くからある。

当館は50年の歴史で、スタート当時は、後援会の方が大きかったりした。

○職員の配置は？

●総務と電気技術関係で11名なので、館の職員は併せて26名。警備、清掃案内業務においては外部に委託している。警備には24時間常時2名という形で行っている。

館内では、植物園も含めて5ポストがある。博物館側の入館口と相談コーナー、総合案内所、植物園はゲートなど5つの場所に人が待機している。土、日の入館者が多い日には、入館関係のポストに2名の担当を置いて対応している。この人達は、外部の人材派遣会社からきている人達である。

大阪市の場合は学芸員部門を含めて全体的な指定管理になっている。学芸員は市の職員であるが、休職派遣という形で協会に移行して、ここの博物館に配置されていることになる。例えば学芸員が直営で、運営部門が指定管理になっているところがある。長崎県とか島根県とかは指定管理に移行している。

○来館者の要望で館内を案内してほしいということがあるときの対応は？

●基本的にそれは対応していない。

○学校とはどのような連携が行われている？

●総務課の中のフロア担当ということで、入館者をどのように対応すればいいか、学校、そのほかとの連携を考える部署がある。

特別展や春や秋の遠足シーズンに集中するが、下見の説明会をフロアスタッフとアルバイトの職員で分担して対応している。より効果的な学習ができるようなことと、効率よく廻れるように工夫している。

文科省や科学技術振興財団の外部資金を獲得し、ワークシートを作成したりもしている。

4. 関連施設調査の記録 2 - 大阪市立自然史博物館 -

○補助金は使っている？

●市の予算はやせ細っているの、ある時期、外部資金を充て、展示解説や説明パネルをわかりやすく作りなおす予算に活用した。

○学校連携の位置づけはちゃんとされている？

●学芸員を含めたTMチームという呼び方で、学芸員が3、4名とフロア担当の教育スタッフが対応している。TMチームは月1回のペースで集まって行っている。学校むけは教育委員会と連携をとるのが難しいが、それをしなくても、配達方法はある。

○博物館から発送する文書と、教育委員会からの文書の取り扱いが違う？

●高校むけは、府下の高校の生物と地学教育研究会があり、ネットワークがとれているので直接担当の先生に届くような形になっている。中学校の場合は、理科部会の専門部会に足を運んで説明、お願いしている。学校の先生にむけ、「サポートします」という風にやっているが、先生自体が忙しくて、対応されていない。熱心な先生は、友の会の会員になって自分で自発的に観察会に出てきたり、室内の実習を学校授業に応用する先生もいた。

○学校へのお出前講座等はやられてない？

●お出前講座等は基本的に行っていない。大阪市立の小学校・中学校で500近くあり、モデル校を作っただけではできない。1校やると「何でうちに来てくれないか」という苦情も出る。ただし、支援学校や大阪市内の院内学級級とかは館まで来れないので、標本をもって伺ったことはある。

団体の学校入館者が増えて来る前に、先生方にどういう風な視点で見学したらいいとか、教科に関連したことなどの研修会を行っている。

○研修室もあるが、例えば生物研究会の先生が会議室に使ったりということは？

●市内外の中学校の理科部会で研修で、こういうことで話してほしいとかの話はある。直接ではなく、先生を通じて連携する。例えば、20～30名の先生が集まってくれたら20～30校と連携することになる。

○先生方をお願いすれば、館内のガイドをしてもらうということになる？

●先生方に資料の貸し出しも行っている。例えば、ドングリであったり、川の石のことを学習するなら、淀川と大和川の石のセットを8セット作って、館の実習室で8グループに分けて学習するセットを作ったりしている。作った当時は貸し出しが多くあったが、チラシだけでは活用する学校が少なくなってきた。後は、教員むけの学習プログラムを夏休みの平日に行うことがある。また、小学生、中学生は無料なので、公園の中の一つとして使われることもある。展示室ではスクラッチクイズ（8種類）と称して4問以上正解すると絵葉書をもらえるシステムがある。

4. 関連施設調査の記録2 - 大阪市立自然史博物館 -

○貸ギャラリー的な部屋もある？

●260名収容の部屋と現在恐竜展を行っている所は有料で、貸し出しの対象となっている。

共催という形であると無料になるし、お金が潤沢なところは有料にしている。

月例で講座を開いているところでは、3つぐらいの団体が有料で使用している。展示室の方は自然史科学に関連したこと、地域の振興に資することなどが共催の条件となっている。2つの部屋は土曜、日曜子供たちの体験学習でつまっている部屋がある。色々相談があって、館で解決しなくても資料を持っていけばどこかで繋ぐ役割が求められる。糸口を見つけることも必要で、いわゆる交通整理を行う必要がある。

○この館の特徴は？

●博物館のまわりにいろんな人がいてくれるということ。友の会やNPOのスタッフもいるし、それぞれの研究やサークルが存在して館を会場にそれぞれで活動している。

2、3年に一度、博物館を会場にした「大阪自然フェスティバル」があり、それぞれの研究サークルや自然観察団体、自然保護にベクトルが向いているところなどが一堂に会して、それぞれの活動を紹介、交流し、ワークショップをやったりする。最近では関係団体からの資金援助もあり、運営スタッフを集めながら大学の学園祭のような形で60～70の団体が行き、やっている本人たちが楽しんでいる。



常設展示室



エントランスホール（淀川周辺の空中写真が埋め込まれている）



開架図書室



友の会の掲示板

4. 関連施設調査の記録 2 - 大阪歴史博物館 -

■大阪歴史博物館との意見交換記録

○新名護博物館基本計画検討委員

●大阪歴史博物館職員

<ボランティア>

●交通費は自己負担で来てもらっているの、完全なボランティアになっている。ボランティアなどの研修費等は館の予算で対応している。活動に関しては、ボランティアの献身的な活動に委ねられている。ボランティアさんは196人いる。女性・男性比は1対1になっているが、年齢に関しては、個人情報等の問題で把握していない。見た感じで、階段の上り降りに不自由のない人が、危険を伴わないような作業であれば、充分従事できるような人をお願いしている。年齢制限は設けていない。一番の高齢の方で80歳を超えている人もいた。だいたい60歳から70歳の方が多い。

ボランティアでやっていただいている活動は、10時から4時半までとなっている。

施設は10～7階が我々の常設展示となっている。ボランティアの方々には、そこでワークシートを中心とした展示・観覧の補助をお願いしている。ただ、8階の歴史を掘るというコーナーでは、「浪速の宮」という史跡の遺構をボランティアにガイドしてもらっている。それは、定時の11時から4時までの1日6回で、「地下遺構ガイドツアー」と呼んでいる。

問題点としては、土、日に入館者が多く、学校団体は木、金に集中しているが、土、日に参加するボランティアが少なくなってくるという点。多くのボランティアは他の所との掛け持ちガイドをしているので、忙しい人が多い。この辺では、大阪城のガイドツアーもやっているの、土、日はそこにいってしまう。本来ボランティアなので強制はできない。

○市外の子供たちも無料？

●市内外を問わず、全国の子供たちが無料で、市内在住の65歳以上のお年寄りも無料。それは、大阪府の条例で定められている。しかし、今年の4月からマスコミ関係と共同で行う大きな特別展は、65歳以上は有料になる予定。常設展は無料。

○ボランティアの配置はどのように？

●ボランティア組織に世話役を作り、その人に意見集約してもらい、館にはボランティア専属の係がいるので、最終的には博物館がやっている。ボランティアには会長職はない。



エントランスのシンボル展示



常設展示室

4. 関連施設調査の記録2 - 大阪歴史博物館 -

<友の会>

●友の会は前からあったので、友の会に自主的な運営を希望していたが、なかなかそれが難しかった。

規則、会長、幹事、総会、予算というような仕組みがある。友の会の方々のニーズに合わせて館を運営していくと、館が忙しい時に友の会も活動したいこともあって、ニーズに応えられない、不満がたまるなどのようなことがあったようだ。その解消に見学会などもやっていたが、かなり負担になってきた。友の会はそもそもどういう組織か、ニーズは何か整理する必要がある。

友の会は300名いて、見学会などすると40～50くらいの人に参加してくる。特別展に関する見学会をすると10名ぐらいの参加者になる。友の会のモチベーションは見学会しかないような感じになる。

また、1年を通して特別展が5、6本あるが、毎回1回は無料で見られる。それから、常設展は年間を通して無料なので、他の公立博物館と比べても非常に条件はいい。年交会費は3,000円である。

○友の会とボランティアガイドとかぶっている人は？。

●中にはかぶっている人もいるが、ほとんどが別である。

○友の会に館内ガイドをさせることは負担では？

●その面では大阪自然史博物館の活動が参考になる。友の会の中からボランティアへの関わりをもち、館全体の活動が底上げされている。友の会が前提にあって、自分達で色々やっていって、その中で館の手伝いもしようという意識が働いている。

○歴史博物館の友の会に運営委員は？

●300名の中から7名の幹事さんがいるが、高齢化が進んでいることもあって厳しいところもある。

○活発になれば職員への非難も出てくる。自分達は休日に出ているのに職員は対応してくれないとか、職員が手伝ってくれないなどの不満も出てくる。

●職員の仕事が見えないのと一緒に、ボランティアのモチベーションも見えない所がある。相互不理解が生じてやめていくボランティアややめていく職員もいる。

○完全無償であるなら保険とかはどうしている？

●ボランティア保険という形でやっているものもある。

○ボランティアの募集はどのようにしている？

●2年に1回ほどの割合で、オリエンテーションの時に2次、3次希望を書いてもらい調整している。

○館内を案内する方法としては、どのようなものがあるか？

●ずっと待っていると、暇そうにしているといわれるし、ずーと付きまとわれると嫌がるお客さんもいる。館の方針をしっかりと位置づけることが必要だと思う。

○ボランティアの特典などは？

●特にない。ボランティアの活動の源は「やりがい」にある。この方たちは他でもやっていたり、学習好きだったり、それを人前で話すことがもともと好きな人などである。

○友の会の会報などはないか。

●年2回ほど館で編集して出している。

実務部分は館の職員が全部行っている。

4. 関連施設調査の記録 2 - 大阪歴史博物館 -

○友の会やボランティアの部屋は？

●ボランティアの部屋はあるが、友の会の部屋はない。幹事さんが集まって会議をする部屋はある。そこは、友の会の名簿であったり、過去の決裁書類などの書類を置くところはあるが、友の会のメンバーが自由に使えるところではない。

○市民のさまざまなグループの把握や連携は？

●組織としての把握はしていない。結局誰が動くかということにつながり、それは個人。組織でワーキンググループがあるとか把握していても、個人の顔が見えないと連携が取りにくい。

学芸員とのつながりが途絶えてしまうと、モロイものであるといえる。

○ボランティアの歴史はどれくらい？

●開館当初からあるので10年間にはなる。

○学校との連携はどのように？

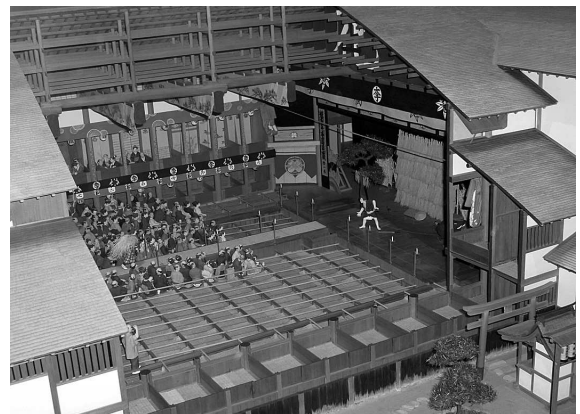
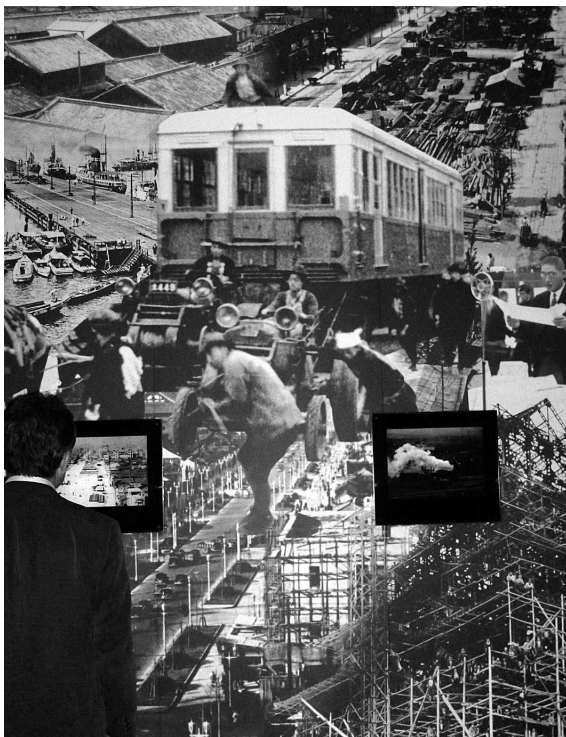
●「ワクワク子供教室」というものがあり、夏休みから秋にかけて歴史講座や発掘調査を行っている。ただ、学校連携といっても体験発掘などに限られる。教職員の研修的なものについては連携しているといえる。

大阪ではすごい数の学校があるので、全学校と連携をもつことは難しい。社会科の先生に呼びかけて浪花の宮の発掘体験をやっていくという方法をとっている。そのほかは、職場体験ということで、おもに中・高校の生徒たちにキャリア学習を行っている。

博物館学芸員向けの大学生に行う博物館実習も行っている。これは、2, 3年前から、大阪市立大学や大阪国立博物館の人しか受け入れないことになっている。全国的にみても博物館実習を受け入れることは、両極化しているところがあって、例えば、国立の博物館は全く受け入れないところもある。今それは過渡期にきている。

ここでは夏休みに30名強ほどが実習していく。それぞれの学芸員が均等に割り振られている。大学の博物館実習は、我々博物館にいるものとしては責任があり、今後も続けていきたいと個人的に思っている。

大阪自然史博物館の友の会のイベントは毎週のように行っている。



1/20模型で建物と人を表現

古い写真に動画を併用した展示

4. 関連施設調査の記録2 - 人と自然の博物館 -

■兵庫県立人と自然の博物館との意見交換

○新名護博物館基本計画検討委員

●兵庫県立人と自然の博物館職員

<建物の特徴>

●ここの博物館は、昭和60年にあった博覧会のフロンティア館パピリオンを利用したもの。

テーマ館としてあったものを改造したで、柱は変えようがない。

皆さんが入ってきた所は実は4階。そこから順番に降りていく形になっている。普通の入館者は3階から入る構造で、通常メインの入館場所になっている。常設展示や展示スペース自体も柱がある空間になっている。

○建物の再利用という点で参考になる。

●ただ、大きなものを2階、3階に設置しようとなると無理がある。アメリカマストゾウという大きな化石があるが、それは1階にしか置けない。展示自体は顕著なものが少ないが、県立大学の自然科学研究所との連携によって、大学の研究員が博物館の職員を兼務する方式で行われている。

大学籍では教授、准教授、講師で25名ほど。県の教育委員会で採用されている研究員も13名いて、研究員としては38名いる。

館は直営で、委託はない。清掃、警備は委託。自然系の博物館である。また、奨学金が免除される機関と日本学術振興会の科学研究費補助金の応募が可能な研究施設として認可されている。

この館の特徴としては、セミナーが開催されているところである。ここの展示物を見てもらうということではなく、館の職員が出ていってキャラバンをやったりしている。冊子に年間のセミナーを記載して、主な行事として来年度分も行っている。

<キャラバン事業>

○そういう方式になった理由は？

●博物館が10年を迎えた時、新たな博物館の展開を考え「今までの縦割りの組織を打破って、いかに県民に広く活動していただいて、館にまた来ていただけるか」というのでキャラバン事業を行った。一般的には移動博物館という形になる。

この事業の特徴は、移動博物館のように、ただ先方に持って行って終わりではなく、地域は地域で多くの資料や団体があるので、そういった方と連携をして地域でそのまま展示を作り上げようという発想に基づいている。



人と自然の博物館外観



エントランスホール（コウノトリの剥製と自然について）

4. 関連施設調査の記録2 - 人と自然の博物館 -

○研究対象としての地域でもあるわけですね。

●地域の人と一緒にやるので、各地のニーズにあった展示をやっていくという形をとった。

地域の化石とか文化とかの資料があると、自分たちの収蔵する自然史系の資料を持っていろいろな展示を作ったりしている。また、国土交通省の方から河口の生き物観察会をやしてほしいとの要望があったので、地域の人達を巻き込んで普及活動を調査したこともある。

○その成果は最終的に冊子にまとめるとか？

●その活動自体が成果になっている。

<収蔵庫>

●収蔵庫の建物の機能は4つあり、1階に(1)地学系収蔵庫と(2)ホルマリン保存等の液浸保存の資料を保管している。

2階が(3)生物系収蔵庫で昆虫、鳥、植物などの標本、3階は(4)実験室となっている。合計で3,000㎡ほどある。

○収蔵庫の機能を果たせる部屋はどのように作った？

●収蔵庫は、橋げたの構造プラス新設で、温度、湿度調整のできる3階建の収蔵庫を造った。

○あまり金のかからないしかけで建造されている。

●建物よりも、セミナーとかそういう活動そのものに重きを置いている。

学校との連携は、大阪などは数が多いのでやらないといていたが、うちの場合は、大きな企画展や特別展を開催しないかわりに、講座を多く開催している。

<学校連携>

○学校連携はどのように行われている？

●組織でいうと生涯学習推進室というものがあって、博物館には事務職と研究職がある。事務職は対外的な窓口で、事業課というイメージ。

生涯学習推進室は研究の先生方で構成されている。事業課は事務職員で構成され、学校の利用とか学校むけの活動をしている。

特徴的なものをいうと、平成23年度(12月まで)はすべての校種が入っている。多いのは小学校で、これは、博物館に入館する団体になる。館内見学やワークシートを活用した見学もある。それ以外に研究員の先生方のセミナー(①一般セミナー・②オープンセミナー・③特注セミナー)が、年間300くらいある。

①一般セミナーは、県民の子どもから大人まで。

②オープンセミナーは、飛び入り参加可能な土・日・祝日のイベント的なセミナーで、何か作ったり、公園を研究員と歩いたりする行事で、年間1,000回弱。

③は、特注セミナーという名称で、学校連携はこのセミナーにあたる。学校の生徒が来て、研究員にお話しをしてほしいという時に行うもので、生涯学習課の方で調整して行う。これは、学校の先生の要望や、事前に先生方がメニューを出している。これも年間300件になる。

来館された学校については、要望によって先生がセミナーを行うことになっている。夏季教職員セミナーなどは、学校の先生を対象にした講座で、夏季休業中のお盆の前後に6日間行っている。

県内の小学校と協定を結んで、博物館の職員が学校に行って授業を行うと、学校の方ではこれに協力するというものもある。博学連携にあたる。23年度実施した3つの学校ではかなり濃密に連携をとっている。

特に、三田高校については、この講座をまとめて簡単なプレゼンをするという方法もとられている。1年間かけた校外講師による発表だけでなく、例えば、カエルの調査方法や植物の調査方法、ピオトープを調べたり、実践的な内容となっている。また、幼稚園、保育園などにターゲットをあててキッズ推進室を作り、博物館が幼稚園や保育園の子どもたちにどう教育活動ができるかの実践事例を研究中である。

兵庫県では、県下の中学校1年生がインターシップと称して、事業所体験、トライアルウィークを催している。県立の施設なので、受け入れをしている。

ここ数年は、年1校程度、学校キャラバン隊を作って研究員等が学校に行きセミナーを行っている。

10年前は、ここで予算をつけて展示しませんかというPRをすると、すごい数の学校から申し込みが来た。

4. 関連施設調査の記録2 - 人と自然の博物館 -

- 生涯学習を意識した活動を展開している感じがする。
- 「人と自然の博物館」のキャッチコピーでは、「ひととはく」は生涯学習を応援しますという表現で、あらゆる年齢層をカバーするプログラムを開発して対応することになっている。
- 生涯学習を博物館が担うというのは？
- 非常にまれなケースではある。県は生涯学習の大学院もめざすという意気込みで、兵庫県立大学には大学院もある。
- 幅広いと結構苦労するのではないかな？
- 先程の大学の研究員が大変ではある。ここは自然史系の博物館のため、生涯学習などの教育系の先生はいない。しかし、私は県の指導主事で、社教主事の資格ももっている。自然史系の先生と私のような人が来るとマッチした形として可能。
- 講座の数が半端でないので大変だと思う。
- 研究員の数が多いということにも起因している。調整は生涯学習課でやっているが結構大変。
- 博物館の機能を追求していくと生涯学習に結びつくので、これはしっかりと行わなければいけない。
- もう一つの特徴としては、シンクタンク。県立大学の教授・准教授を兼務している方が、県の委員会などに出かけて政策提言まで行っているところがある。

- 来年度（24年度）で20周年を迎えるので、新たな展開として未就学児、児童館などへ行って、自然について目をむけ、関心をもってもらうことをめざしている。
セミナーは定員があり、20名から個人でもオープンセミナーがあれば受ける。原則として「セミナーには何かある」という風になっている。
土・日には必ず何か催している。リピーターも多く、植物系のセミナーなどは、あっという間にマニアで埋まってしまう。展示は、大学並置の施設なので高校生以上、大人をめざした展示を心がけたが、近年は先生方がシフトチェンジして、子ども向けの展示になっている。

- 展示解説や案内をどのようにするか、誰がやるかという問題は？
- この場合は、昔はコンパニオンの人がいたが、現在は委託でフロアスタッフという名称の方達が、展示の説明や催し物を手掛けたり、来館者の要望に応じて説明したりしている。原則として展示物の解説はしていないが、必要であれば団体申し込みの時にリクエストしてもらい、研究員が解説することもある。

<入館者数など>

- 入館者数はひとつの指標にはなるが、単に来館者だけを見ると減ってるとか増えてないといわれるが、館が待っているのではなくて、館がしかけて行って活動しているという事もある。当然そこでは、来館者に代わる別の切り口で活動しているということも主張できる。決められた目標については達成している。
収益という面では、実際大人が200円で中学生以下は無料、高校生100円、大学150円。
特別展でもやって1000円。2000円の入館料をとるというのはやっていないので、金銭的な面では特別展をやるにもペイできるか・・・事前のお金もいる。
入館者数は同じくらいでも県の予算が厳しいので、展示会には予算がかけられない。

- しかけていくことは危険が伴うが、保険はどのようになっている？
- セミナーごとに任意保険に入っていて、賠償希望の先生は追加で保険を掛けるようにしているが、すごく安い。セミナー代金は高くても1000円ぐらい。野外観察会は頻繁に行っている。参加者は高齢の方が多いので事前に下見をしてから実施している。
健常者向けセミナーでは、足腰の弱い人に遠慮してもらうこともある。

4. 関連施設調査の記録2 - 人と自然の博物館 -

○セミナーに来ている人達が一緒に活動することは？

●それぞれで活動グループを作っているところがあり、「人と自然の会」などは、セミナーで集まって来た人達が自分達でたちあげて10年近くやっている。グループとして独立しているところもある。

市民のワーキンググループなどには、研究員が顧問のようについて、今でもアドバイスしている。

セミナーは担い手の育成にもつながる。昆虫などはセミナーの中でも、中学生や高校生を集めて数回の連続セミナーを行い、毎年2月になると研究発表の場を作っている。その成果報告書が「きょうせいの広場」という冊子になって現れる。

○これはボランティアとは違う？

●ボランティアは博物館の組織の中であって、そこに帰属するが、「人と自然の会」などは対等な立場で、NPO法人格をとって独立している。その人達はセミナーの講師も務められるようになっている。このグループは館からお願いするのではなく、自発的に自分達の研究を行っている。

専門家を養成して、その方が指導者として講師を務めるまでになる。博物館の役割はそういう人やグループを県内に増やすことで、生涯学習社会に貢献できるということになる。

組織には、高齢者のいる組織や、やりたいことをやるために、さらに班を作っているグループもある。

人によっては楽しみで来ている人もいるし、学校教育にも参加したり、組織を積極的に運営したいと思っている人もいる。

活動としては、森林再生の研究部などは里山などの先生方の影響を受けている。

○環境問題を学習すると、自然保護や地域社会の課題解決の活動につながることもある。

●例えば、イノシシやシカの害と保護の問題について、館に意見を求められたことがあるが、研究員の先生から学術的なことを示唆していただき、保護と駆逐の判断にはタッチしなかった。

ここの博物館で連携グループとして登録するためには、研究員が必ずいるようになっている。それは、主担当と副担当の2名がいることが条件となっている。

研究員が連携グループをまとめる、いわゆる学校部活の顧問みたいな恰好になる。セミナーを運営するのは生涯学習課が取りまとめることになっている。内容については研究員の先生方に任せ、事務局は日程とか部屋確保、広報を行う。

募集では県内にガイドブックを配布し、ホームページのウェブ上からも申し込める。セミナーは冬場のメンテナンス休館の時にも野外学習としてやる。夏休み期間は休館日なしで開館する。中の職員はローテーションで休暇をとるが、館としては開いている状況。

土、日、祝祭日は開館だが、月曜日が祝日の時には翌日の火曜日が休館になる。

○研究員の方たちの研究成果は？

●研究の成果は研究員ごとに官報に掲載されている。研究だけでなく、社会教育活動などシンクタンクの活動も記載されている。

シンクタンクの活動としては、県内外、国関係の委員会に出席して提言したり、専門分野のことで提言をしたりする。市民グループで里山の環境を作りたいという時に、運営指針を作るなどの受託行務のような依頼もある。

○夏休みの自由研究等への支援などは？

●夏休みの最後の週に、それぞれの研究員が詰めていた頃もあった。その他に夏季教職員セミナーをやっている。現在では、随時持ち込まれたものに研究員が対応するという形をとっている。例えば、初任者研修や10年目研修とかがある。それ以外に自分で来たいというものもあり、座学よりも体験学習に人気がある。また、アンケートを取ることで、ニーズの把握が可能であり、来年度はどのようなものを行うかの指針になる。

4. 関連施設調査の記録 2 - 人と自然の博物館 -

○友の会は？

●特にない。色々議論はあったが、特別展などを行ってないので、友の会を立ち上げて運営していくまではしていない。

友の会ではないが、「人はくセミナークラブ」というものを作っている。「ひとく手帳」と「ひとくカレンダー」は毎年作られており、情報提供を行っている。メールマガジンは、毎月1回電子メールで受け取れるという形をとっている。

セミナー方式は入館者に準ずる活動。できるだけいろんな所に参加したり、地域展開推進室という部署があり、研究員が兼務する場所がある。兵庫県では、各地に2、3名配置してその人物を中心に事業を展開させ、キャラバン事業を行っている。どこかの地域であるテーマにそった展示会をやると、うちの資料を使って展示し、共催の方法で行うこともある。

来年度は20周年記念で、マイクロバスを改造した移動博物館が可能なツールを作ることになっている。

○セミナーの運営の方法で、研究員は謝金が発生する？

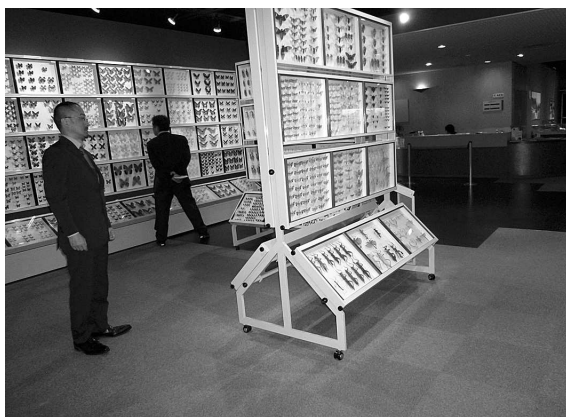
●県の職員で発生しない。研究員が計算して参加費を見積るが、材料費で赤字をだすこともある。ホームページで報告されている。



常設展示室（クジラの骨格標本展示）



特別展示（高校生と収集・作製したキノコ標本）



常設展示室（昆虫標本）



市民学習室

4. 関連施設調査の記録 2 - 調査を終えて -

末吉 司

○はじめに（視察の視点）

今回、新博物館の建設検討委員の一人として県外の先進地視察の機会を得た。今後の新名護博物館建設に向けて、市民の目線として利用者の視点、博物館活動と地域住民との係わりという点を中心にヒアリングを行なった。利用者の視点では、展示や人の導線および博物館の立地する周辺環境との調和など。また地域住民との係わりという点では、博物館と友の会との関係および運営、そして地域の学校との関係などである。

○所感

<滋賀県立琵琶湖博物館>

琵琶湖博物館は1996年開館の琵琶湖の生物や環境をテーマにした博物館で、水族館を含め人と自然との係わりを過去から現在へと繋ぐ形での展示が印象的であった。学芸員が30人という規模で、企業との連携による琵琶湖観察プロジェクトや職員交流で教員が2人、そして河川土木、農業、水産、輸送分野の技術職のスタッフが各1人配置されており、人的な配置がよく考えられていると感じた。

博物館と市民との係わりでは、150人程度の「フィールドレポーター」と「はしかけ」と呼ばれる独自の制度で15グループ300人程度の方が、自らの関心で自主的な活動が博物館の活動とよくかみあっている印象であった。互いに協力し合いながら過度に依存せず、それぞれの立場で観察、研究、啓発活動へつなげている点は参考になった。

運営は、展示交流委員として窓口業務等、水族飼育業務、資料整理業務はそれぞれ外部委託している。博物館での案内説明は行っていない。ミュージアムショップ、レストランを併設しており、レストランでは琵琶湖でとれるブラックバスの料理などを食することも可能で、ユニークであった。非常に充実した施設および組織で、博物館の理想形の一つではないだろうかと感じた。

<大阪市立自然史博物館>

この施設は大阪市住吉区にある長居公園内にあり、植物園と併設していた。大きな公園内に立地していることもあり、緑豊で空間的にも屋内から屋外へつながる開放感のある施設であった。

大阪市立の博物館が5つあるそうで、市立の博物館は「(財)大阪市立博物館協会」という組織に指定管理業者として運営を委託している。学芸員数は15人で入館者は年間およそ30万人である。

この館の特徴は、友の会が1,700人登録しており、会の運営は2001年にNPOを設立していることである。また家族会員制度として会員の家族は無料となる特典をつけることで利用者へのメリットを出している。

また博物館友の会以外にも多くの団体が博物館と協力して観察やイベントなどを行なっている。管内の案内業務は行っていないが、学校向けには教員と博物館スタッフが協力してチームを作り教材研究や博物館の利用についてプログラムを作っていることがユニークである。



大阪市立自然史博物館常設展示室

4. 関連施設調査の記録 2 - 調査を終えて -

<大阪歴史博物館>

大阪市中央区にあり、大阪城公園に隣接した難波宮跡にたつ施設である。開館は2001年で歴史博物館としては先駆的な館であり、総工費330億円で近代的な建築で10階建てのビルである。

学芸員は18人配置され、運営は大阪市立自然史博物館と同様(財)大阪市文化協会が行なっている。映像や音声を使った開設やリアリティのある展示手法で大阪の過去から昭和まで体系立てて学ぶことができる。

友の会は、展示補助員として管内の数箇所に配置され、利用者が持つワークシートにスタンプを押すなどの作業を行なっている。友の会の人数は200人弱で高齢者が多い。それ以外に博物館地下にある難波宮遺構のガイドなども行なっている。学校との連携ではわくわく体験教室として発掘作業の体験や教職員の研修という形をとっている。



難波を意識した大阪歴史博物館

<まとめ>

今回、3つのタイプの違う博物館をまわり、訪問した各博物館でもそれぞれの博物館で丁寧に対応していただいた。(私用で人と自然の博物館は視察できず)

視察した3館はいずれも大都市およびその近郊に建つ規模の大きな博物館でその展示内容、組織、建物などどれをとっても非常に素晴らしいものであった。琵琶湖博物館は60万人/年、大阪の両博物館はそれぞれ30万人/年の来館者があるそうで、名護博物館とは単純な比較はできないと感じた。

組織運営はみな指定管理者制度や外部業務委託などを採用し、学芸員以外はアウトソーシングが進んでいると感じた。

友の会や学校との連携に関しては、琵琶湖博物館の「はしかけ」制度が参考になるのではないかと感じた。名護市規模では博物館友の会をNPOなどの法人化しても結局事務局は行政がみるなどとなる状況では、本来の意味が薄いのではないかと感じた。また来館者に対する説明は展示の中で行い、極力個人の主観が入ることを避けている点が興味深かった。社会教育施設として子供たちの学びの場である博物館は、学校との連携を当然と捉えているが、その連携の手法は独自色が発揮され博物館のあり方に依拠するものだと感じた。どう係わっていくかはまさしくこれから議論し、理念のもとに地域や学校との活動計画が作成されることを望む。

最後に、視察した博物館の建物は今の社会情勢からは非常に贅沢に感じるくらい立派であったが、やはり活動の中身はその地の歴史・文化・環境など人との暮らしの中で成り立つものであり、使う人、訪れる人、研究する人、それぞれがみんなで作っていく「ぶりてい」であるべきだと思った。

4. 関連施設調査の記録 2 - 調査を終えて -

宮城 一夫

<施設、設備、職員>

これらの博物館は、展示、収蔵室、職員数共にバブル期に建設され、豊富な公的資金を背景に広大な敷地、設備、職員体制が実現されている。市職員、県職員、大学の職員、指定管理等で運営されている。

<活動内容>

滋賀県立琵琶湖博物館は近畿地方の水郷としての琵琶湖への関心は高く、特に環境問題、水中生物の調査を「橋渡し活動」というグループで企画し市民、国際機関WWF、地域の企業等と連携で活動している。

「大阪市立自然史博物館」は競馬場の跡地利用に「生活と自然」をテーマに活動している。研究員が多くそれぞれの専門分野で市民に参加の募集し、活動や成果の為にパネルがある。

「兵庫県立 人と自然の博物館」は大学の研究員が多く多数のセミナーを設置、出張講座を多く実施している。

<学校、地域連携>

琵琶湖博物館は教員2名が配置され学校との連携、調整にあたる。大阪市立自然史博物館は周辺小学校、中学校等が多く、個別の学校の対応はやっていない。

<友の会、ボランティア、サポート活動、サポート隊>

大阪市自然史博物館のボランティアは1,700人で、ネットでの応募が多い。会費3,000円で家族会員が多い。

<施設、設備>

大阪市自然史博物館の収蔵室の規模、設備、収蔵システムが完璧で圧倒された。巨額の費用、ランニングコストが必要。

<展示>

大阪市自然史博物館の展示スペースは大きく、様々な迫力ある展示が可能である。地層、岩石、水辺の生物、生活の表現が素晴らしく、研究員の工夫が感じられた。昭和生活展示場のフロアの大阪の航空写真は利用度が高く広がりを感じた。

展示物を作る技術は各博物館とも創意工夫し研究の蓄積を感じた。

<まとめ>

先進地と言われた博物館の視察で、敷地、展示スペース、内容、市民活動、職員体制、他の機関との連携の可能性について多く学ばせて貰った。

名護博物館は今までの独自活動を整理し、市民の為に利用度の拡大化を図ることが重要である。

要は市民の参加の仕方がポイントである。